

【聖書】

ルカによる福音書 2:22 さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23 それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24 また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。29「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。31 これは万民のために整えてくださった救いで、32 異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」33 父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。34 シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするためにと定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」

1 お言葉どおり去らせてくださいます

2021年も最後の礼拝となりました。今日の聖書は、伝統的な教会では年末に読まれることが多い所です。理由ははっきり判らないのですが、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。」という言葉から来ているのではないかと想像します。昔の教会は、待望の救い主を腕に抱くシメオンの姿に、歳月を重ねる恵を見出したのかもしれませんが。また、この印象的に始まるシメオンの一連の詩は、＜シメオンの賛歌＞と呼ばれ、カトリック教会などでは、夕方の祈りと共にうたわれるようです。それほどに、この賛歌は、印象深く私たちの心に迫ります。「ああ、これで何の思い起す事もなく死ねる」とシメオンは語っています。「ああ、これで本望だ」と言っているのでしょう。最後になってそう詠える人生は素晴らしい。いったい、この人はどういう人生を送って来た人なのでしょう。

2 律法の中で生きる

さて、話は変わりますが、産まれたばかりのイエス様を連れてマリア・ヨセフ夫婦がエルサレム神殿に宮参りに来たのは、「律法」に則ってのことでした。ルカは、22節から24節。たった

3節の間に「律法」という言葉を3回も使っています。それは、イエス様がユダヤの民の中に生れて来られた、という事を伝えたかったからだと思います。救い主が人となった、しかし、無国籍で生まれたわけではない、人間社会の中で人となった、それもエジプト人でもローマ人でも、他のどの国でもなく、神の民ユダヤ人社会の中で、神との約束の中で人となられた、とルカは強調しているのです。

22節に清めの期間とありますが、子供を出産した女性が家で静かにしているように定められた期間でした。医療の発達していない古代世界、命がけで子どもを産んだ女性の体を守るための決まりであったようです。その清めの期間が過ぎた時、イエスさまは神にささげられる為に、エルサレム神殿にやってきました。「長男は神のものであるから、神に献げよ」というのが神さまの言いつけ。しかし、それでは家の仕事を継ぐ者がいなくなりますから、子供を神さまにささげた後、祭祀を介して、いけにえを神に渡し子どもを買い戻していたのです。このいけにえ、本来は子羊でしたが、ヨセフとマリアは貧しかったのでしょう。そのお金がなかった。だから、山鳩一つがい家鳩の雛二羽を献げるため、その代金をもってやってきました。このように、イスラエル、神の民の生活は、その誕生から、律法が定めた神との関係の中にありました。

しかし、律法によれば、このように子どもを連れてやってきた両親を迎えるのは、祭祀の役割でした。一方、ルカは祭祀のことを一言も触れていません。祭祀たちは、貧しいイエスとその両親を心に留めることがなかったからでしょう。本来の子羊ではなくて、鳩でごまかさねばならないような、貧しい者達を祭祀たちは、あまり顧みなかったのかもしれませんが。律法、神と神の民との間の健全な関係に、人間の思い上がりが入り込み、これを歪めてしまう、罪の姿が垣間見る思いがします。一方、なにはともあれ、産まれたばかりのイエスは、神にささげられる為に神殿へとやってきました。その時、彼を受け入れたのは、祭祀ではなく、シメオンでした。

### 3 祈りのひと

祭祀に代わって、神にささげられた幼子イエスを受け取ったシメオンは、どのような人なのでしょう？ 明らかに祭祀ではありません。神殿につとめていたわけではない、現代風に言えば、聖職者ではなく、一般信徒です。そして、聖書には「この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。」とあります。神と正しいお付き合いをし、信仰あつく生きて来た人。しかし、シメオンがどのような身分かどのような職業の人なのか、どんな家族がいたのか、どんな風貌をしていたのか、どのくらいの年齢であったのか等、ルカは一切記していません。ルカは記していないのですが、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。」と言う言葉から、かなりの高齢であったのではないかと想像されてきました。

そしてシメオンは「イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。」とあります。年を重ね体が弱ってくる時、どうしてもその苦しみや痛みが心を占領され、自分

のことばかり考えるようになります、それはもう当然のこと。ですが、シメオンは自分のことだけではなく、自分も含めて神の民イスラエルが慰められねば、神の民としての誇りと喜びに満たされて生きるようにならなければ、死ぬに死にきれない、という強い思いを持っていた人でありました。ここからシメオンについてわかることがあるでしょうか。シメオンは、祈りのひとであった、ということが分かるのではないのでしょうか。何かどうしても心にかかることがある、これが心かかりで死ぬに死ねない、そんな切実な望みを抱きつつ、聖霊がとどまり神への信仰が与えられている人の心には、必ず神への祈りが生まれます。彼の心にいつもあった祈り願いは、「イスラエルの慰められること」。シメオンは、自分や自分の家族のためだけでなく、他の人達の幸せを願っていました。

それもまた、シメオンの心に、絶えず神への祈りがあった証であろうと思います。自分の為だけに祈る人は、祈りのひととは言えません。シメオンにいつも留まっていた聖霊は、愛の霊。シメオンは長い歩みの中で、聖霊の導きの中にあつて、他の人のために、イスラエルの為祈る人へと変えられていった、と言ってよいのではないのでしょうか。

#### 4 最後まで残るもの

祈りながら歩む人生、それはどういうものなのだろうか、尚もシメオンの歩みに思いをはせつついた時、偶然にも、ある一つの文章との出会いがありました。教会ともクリスチャンとも殆ど関係ない「傷口から人生。メンヘラが就活に失敗したら人生が面白くなった」という本の一節です。あらすじは、主人公の「私」が一流企業の最終面接の直前でパニック障害に陥り、面接に行けず、引きこもってしまいます。主人公の「私」は、何とか失敗から立ち上がり、引きこもりから脱出しようとあがいているうちに、以前、出会った金さんという宗教学者の言葉を思い出します。世界中を旅している彼が最も感銘を受けた場所が、スペインの「カミーノ・デ・サンティアゴ」という、フランス南部からスペイン北西部にまで続くキリスト教の巡礼路です。フランスのピレネー山脈の麓から始まり、キリスト教の三大聖地のひとつであるスペイン北部の都市、「サンティアゴ・デ・コンポステーラ」まで続く、いわばスペイン版お遍路。毎年3万人を超す巡礼者たちが、山や谷、生い茂る深い森、荒野を超え、全長850キロメートルもの長い道のりを歩きます。金さんは20年前にそこを歩いて以来、すっかりその道に魅了され、もう四度もその道を歩いた、と聞いた主人公の私は、金さんに尋ねます。「その道を歩いて、何を得たんですか?」「得たんじゃないんです。捨てたんです。」彼はそう答えます。「何かを得るために、歩くんじゃないんです。ただ、失くすんです。道というのは、すべてそのための装置なんだ」。そして続ける。「人生と、旅の荷づくりは同じ。要らない荷物をどんどん捨てて、最後の最後に残ったものだけが、その人自身になる。歩く事、旅することは、その『いらないもの』と『どうしても捨てられないもの』を識別するための作業なんですよ。私の人生は残り長くてあと20年くらい。その間にどれくらい、要らないものを捨てられるかが、『自分が何者だったか』を決めるんです」

この言葉にハッとしました。私はそれまで、「シメオンは、人生で神様から何を得た人なの

だろう」と考えてきました。私自身が、いつも「神様から何が得られるだろうか」と考えて生きているからでしょう。しかし、この金さんの言葉で気づかされました。「ああ、そうだ、シメオンの人生も、神の御前に色んなものを捨てる人生であったに違いない！」と。ただ捨てる、というよりは、父なる神にお返しをしていく、と言ったほうが適切でしょう。シメオンは、神から聖霊を頂き、祈りに生きた人であった事は間違いないと思います。そして、その祈りのうちに、自分の思いを神に委ねた、神にお返しして空っぽになった。その空っぽの自分の中に、神から多くの恵みが満ち、その都度その都度の導きを得て歩んだ。そんなふうを得た導きや恵も、シメオンは自分の手に握りしめておかず、神にお返ししたのだと思います。栄光を神に返し、身軽になって歩んだ人ではなかったか、と。次のように言ってもよいかもしれません。シメオンは、真実に神に自分をささげつつ歩んだ人であったのだと思います。

次のように言ってもよいかもしれません。今日の聖書のずっと後、主イエスが公に神の国を宣べ伝え、十字架が間近となった時、弟子たちに次のように語られたとヨハネ福音書は記しています。「私は道であり、真理であり、命である」。イエス・キリストという道を歩く時、私たちは、真理以外のものをどんどん捨てていく事になる、そして真の命へとたどり着く。何が私の人生にとっての真理なのか、何が最後に残るべきものなのか、それを神に問いかけつつ、祈りながら、イエス・キリストに従って生きる。その時、必ずそれぞれにとっての真理が明らかにされます。何故なら、この自分に本当に必要なものを、私たちは実は分からない、でも神はご存じであるから、祈るのです。祈りつつイエス・キリストに従いつつ道を歩む時、最後まで残るものが具体的に必ず示されます。

そのように生きた人に使徒パウロがいます。聖霊の内に生き、聖霊をその内に与えられて生きた人です。彼は、「最後に残るのは、“信仰・希望・愛”」と語りました。シメオンも全くそうでありました。「イスラエルが慰められるのを待ち望み」とあるように、彼の心には他者への愛がありました。そして「主が遣わすメシアに会う」という希望が、彼の内に残りました。その土台には、信仰があります。この私たちから何者も奪い取ることができず、私たちに最後まで残される愛・信仰・希望に、シメオンは豊に生かされて続けた人ではなかったか、と思います。

## 5 万民の救い

そして、長い長いおそらく何十年にもわたるシメオンの祈りを天の御神は、遂に聞き届けてくださいました。自分の希望が実現したことを、シメオンは確信します。救い主がまことに人となられたのだ、小さい幼子として生まれ出てくださいました、両手にその重みを感じながら、シメオンは、次のように歌うことができたのです。「これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」律法で規定された神の民のただ中で生きてきたシメオンであるのに、神の救いが神の民以外の異邦人、神も、神の律法も知らない外国人にも及ぶ、と預言します。これは当時の律法に生きる民としては破天荒な預言です。神の救いは、民族の粹などで囚われるものではない、人間が築き



上げた壁を突き破り超えて行き、神の救いは全人類の上へと及ぶ、とシメオンは預言しているのです。これこそ、聖霊を通じて天の御神から与えられた確信に違いありません。人の想いに囚われない神の自由を賛美する言葉です。この救い主は、ユダヤ人以外の異邦人、外国人を照らす光となる。神を知らず、自分達や自分達が造ったものを神々として生きる異邦の民にも、神の救いの光は、朝日のごとく昇る。そうして、この光の源であるイスラエルの民の誉れとなってくださる、と。シメオンのこの預言は、的中しました。その証人は私たち一人一人。2000年後、この幼子を救い主として生きる者が、極東の日本にも起こされているのです。マリアとヨセフだけが聞いたシメオンの確信が、今では世界中で何十億という人々が信じる信仰となりました。

しかし、その道は決してたやすいものではありません。むしろ、苦難の道でありました。人となった神の独り子の、まことの父である神ご自身が鋭い痛みと苦しみを負われる。救い主の母マリアが、その心を槍で刺し貫かれる、とのシメオンの預言は、人間の思いがはるかに及ばない事ではありますが、天の御父の痛みを指し示している、と考える事ができるのではないのでしょうか。神はご自身の痛みや苦しみよりも、私たち人間が救われ、ご自身との親しい関係に生きることを望まれたのだと思います。真実の愛は、悲しみを知っています。相手に拒絶される悲しみ、痛み、いや、相手に殺される苦しみさえも知っています。それでも尚、ご自身を殺すような者達をも赦し、みそばに招こうとする、底知れぬ深さと高さと大きさと広さが、神の愛、真実の愛にはあるのです。この愛から漏れる者など誰もいません。だからこそ、人の罪に傷つき、人を傷つけてきて弱り果てている私たち人間の魂の痛みを包み込み癒す力があるのではないのでしょうか。

この神への信仰に生きよ、神への希望に生きよ、神の愛、神への愛に生きよ、と信仰の大先輩・シメオンは、私たちに呼び掛けています。神の御前に捨てるべきものを捨て、ただひたすらにイエス・キリストに生きて、シメオンの後に続けたいと願います。